研究ノート　“迷惑”の意味の変遷についての一考察

横川澄枝

要旨

“迷惑”という語は中国経由で入って来た漢語である。現代における意味は中国ではもともとの仏教語が有していた意味の色彩を残しているのに対して、日本語においてはもともとの意味あいが薄れて、一見全く異なった意味のように見える。もともと、字義どおりの「まよふ、まどふ」の意で用いられていたこの語は、中世後期に至り、特に当時の口語を反映するキリシタン資料では「困惑」や「難儀」や「苦悩」の意でも用いられ、同じく口語を反映する狂言などでは「他者の行為によって引き起こされた不快の感情」や「己の行為が他者に不利益をもたらしたことによる申し訳なさ」を表明する語へと意味の幅を拡大し、意味的力点を漸次移しつつ現在の意味に至っていると思われる。その意味の拡張の軌跡を実際の用例に辿ることができる。

【キー・ワード】迷惑（まよふ　まどふ）　困惑　難儀　苦悩　不快

1　はじめに

「人様に迷惑をかけないように　～する／～しない」というのは日本人的なる行動規範の一つである。最近の新聞投書には、一頃騒がれた電車内でのウォークマンによる音の垂れ流しに代わって、携帯電話のはた迷惑さかげんを訴えるものが目につく。かつてそのものずばり「風邪は社会の迷惑です」というテロップが流れるテレビＣＭもあった。親が子を叱るとき、しばしば「ほら、およその人に迷惑でしょ」という言い方が用いられ、老いた親は「子供に迷惑をかけたくない」と語る。かように日本人の行動の“しばり”となっている“迷惑”なる語に焦点をあて、この語の持つ意味の歴史的変遷のありさまを実際の用例に辿りつつ考察した。具体的にはこの語の用例を多く見いだしたキリシタン文学・狂言の資料に焦点を当てる。

2－1　“迷惑”という語の出自ともともとの意味

山田孝雄（1940：p. 400)に『法華経』「方便品」にこの語が見られるとの指摘がある。以下に仏教関係の資料をあげる。

・①迷い。道理に迷うこと。心が（道理について）迷い、とまどうこと。シナ・日本では、迷は事理をあやまり、惑は事理に明らかでないことであると解釈されることがある。　『佛教語大辞典』（1975）東京書籍

・謬於事理云迷不明事理云惑。唐華厳経五曰「觀佛神通境界無迷惑」法華経方便品曰「無智者錯亂迷惑不受教」教行信證三末曰「沈没於愛欲廣海迷惑名利之大山」　『佛學大辭典』（1981）新文豊出版公司

以上に見たように、“迷惑”という語の出自は仏教用語であり、意味は「事理をあやまり、事理にくらいこと、一迷うこと・道理に迷うこと」であった。

漢語に訳された仏典が日本に入った当初は上のような意味で解されていたと思われるこの語が、意味的変遷の過程を経たのち、現在では「はじめに」で挙げたような使い方をされている。

では、漢訳仏典をなした中国においては、現在“迷惑”という語はいかなる意味あいで使われているのだろうか。現代中国語にその用例をさぐる。

・并且把這種錯誤的看法到處宣伝，迷惑人民大衆，…

（しかもこのようなあやまった見方をいたるところで宣伝し、人民大衆をまどわしている）

・他們似乎并無悪意，也迷惑于所謂“一次革命論”，…

（かれらはべつに悪意はないようだが、やはりこの「一回革命論」なるものにまどわされて）

『毛沢東選集』

・她的花言巧語迷惑不少人。

（彼女の甘言は多くの人を惑わした。）

・听了他的話，我心里頓時迷惑起来。

（彼の話を聞いて私はにわかにどうしたらよいか分からなくなった。）

『現代漢語学習詞典』

中心的な意味は「迷う、惑う」である。このような、現代の日中両国語の意味の差異を、次の日本語から中国語に翻訳された作品中の用語から見ていく。

・いや御母さんには却って御迷惑です。…　御迷惑は知れている。

那反而対不起她老人家　…　我知道這是不行的。

・然し財といふものは人の心を迷わすもので…

何況，財産這様東西最会迷惑人的…

『金色夜叉』

・世の人の心をまどはすこと、色欲にはしかず。

能迷惑世人之心者無如色欲。

『徒然草』第八段

これらの例から見られるように、現代中国語における“迷惑”の意味は日本語の「まどわす、まどう」に対応するものであり、現代の日本語における“迷惑”の意を表すには、中国語では「対不起（すまない、申し訳ない）」や、「這是不行的（よくない）」などの語を用いて訳されている。顧みれば1972年の日中国交回復の折に物議をかもした田中首相の「御迷惑」発言も、日本側挨拶の「（日本が中国人民に）多大の御迷惑をおかけした」を「我国給中国国民添了很大的麻煩」と訳したことから発したものだったが、文脈によっては「添麻煩（お手数をかける）」とも訳されている。けだし、日本語の“迷惑”という語で表現し得る範囲は、「不注意で水をこぼして他人の服にかけてしまった」程度から、「他国を侵略蹂躙した」ことまでをも含んでしまう曖昧さをもつ。

以上のように現代中国語では“迷惑”の意味は「①辨不清是非；摸不着頭脳（是非を見分けることができない、さっぱり様子が分からない）②使迷惑（①のようにさせる）『現代漢語詞典』（1996）商務印書館」である。

“迷惑”なる語は、漢語に訳された仏典の中の語として日本に入ってのち、現代ではもともとの漢語における意味とは異なった意味あいで用いられるようになったが、その出発点となるのは以下に掲げる意味である。

［元来の意味］　　迷うこと・道理に迷うこと

2－2　　現代用いられている意味

“迷惑”という語は日本では現在如何なる意味で用いられているのだろうか。『日本国語大辞典』（1976）小学館によれば、

・①どうしてよいかわからないで途方にくれること。とまどうこと。

②ある行為によって、不利益、負担、または不快さなどを感ずること。またそのさま。

イ　自分自身に及んだ結果そうなる場合。いやだ、断わりたい気持だ、などの気持を込めて用いる。

ロ　相手に及んだ結果そうなる場合。気の毒である、申し訳ない、などの気持を込めて用いる。

③ある結果生ずる、不利益、負担など。

このように、現代において、“迷惑”という語はある行為の結果感ずるところの不利益、負担、不快さを表す語として多く用いられる。その行為が他者によってなされ、そのために自分自身が不利益、負担、不快さなどを感じる場合にはいやだ、断りたいというような気持ちを込めて使い、一方、その行為を自身が行い、そのために相手に不利益、負担、不快さを感じさせてしまった場合には気の毒だ、申し訳ないというような気持ちを込めて用いる。これは「1 はじめに」において提示したもろもろの例に合致していよう。

また“迷惑”の類義語には「いやな目に遭わされて困ること」、「困って戸惑うような思いをすること」即ち“苦悩－くるしみなやむこと”系の語群と、“苦痛－心身が苦しいこと”系の語群とがある。『類語国語辞典』(1985)角川書店

次の例において“迷惑”という語の含むニュアンスを見てみたい。

- 「わかんないよ、そんなこと。でも父さんは迷惑そうにしてたよ」
  「そりゃあ康二の前だもの。迷惑っていうより、困惑だろう？」　『風』
- 善意は時として、悪意に勝る迷惑を与える…　『風』
- （切符販売機の前で並ぶ列の中に携帯電話で大声で話している男がいた。）横の列に並んでいたオジさんが突然大きなクシャミをしたときだ。すると、その男は、「ウルセエ」とデカイ声でオジさんに怒鳴ったのだ。他人に迷惑をかけるのは構わないくせに、他人に少しでも不愉快な思いをさせられることは激しく拒絶するのだ。　『教育』
- 人質や人質の家族に大きな心痛をかけ、国会、政府、国民に大変心配をかけた。主催国として多大な迷惑をかけたことに弁解は許されないと思う。『朝』

これらの例から、“迷惑”は“困惑”に比して対手に対する非難のニュアンス、あるいは蒙った不利益への不快のニュアンスを帯びていることが、そして“心痛”や“心配”を包括する上の概念であることが感じ取れる。また日本語教育の場で“迷惑の受け身”という概念を用いるが、主語で表されているものが他者のなした行為によって不利益を蒙ったというニュアンスを表す場合に用いる。

かように、現代語においては“迷惑”という語は、他者との関わりの中で不利益を与える、受けることに伴う心情的な側面―具体的にはいやだという気持ち―を表出することに重きを置くように思われる。

［現代における意味］　不利益・負担・不快　―　いやだ・申し訳ない

2－3　出自から現代までの意味の変遷

迷うこと・道理に迷うこと

⇩

不利益・負担・不快―いやだ・申し訳ない

この２つの意味あいの間にはかなりの懸隔があるが、通時的にこの語を追ってみれば、２つの意味の間隙を埋めるべき意味の変遷の過程をかいま見ることができるのではないか、こう考えていくつかの資料に当たってみた。

３－１　　日本文学における用例

『風土記』・『日本書紀』にも、また『竹取物語』をはじめとする、中古から中世への和文脈の主要な文学作品にはこの語の用例を見いだせなかった。(注)ただし、物語ではないが『万葉集』に柿本朝臣人麻呂の作１例を得ている。

・埴安乃池之堤之隱沼乃去方乎不知舍人者迷惑

（埴安の池の堤の隱沼の行方を知らに舍人はまとふ）『万葉集』巻二　201

“迷”も“惑”も訓は「まとふ」だが、“迷惑”の訓を「まとふ」としてあるのは、注意してよいと思われる。

調べ得た範囲でこの語が現れるのは中世の軍記物語である。

・其声響谷為多勢之粧義廣周章迷惑之處　　『寛永三年版　吾妻鑑』七ウ

・荊軻たち歸（ッ）て「舞陽ま(ッ)たく謀反の心なし。たゞ田舎のいやしきにのみなら(ッ)て、皇居になれざるが故に心迷惑す」と申ければ、臣下みなしづまりぬ。　　『平家物語』351

この２例は前後の文脈から見て、先に挙げた仏教用語としての「迷うこと、道理に迷うこと」から、やや意味の焦点のズレた「とまどう・どうしてよいか分からない」という意味に解釈される。「とまどう・どうしてよいか分からない」という意味は現代の中国における意味とも重なるが、これは「迷うこと・道理に迷うこと」の延長線上に位置付けられよう。『平家物語』のこの箇所に関連して、『史記荊軻傳』では「振慴」が『平家物語』の「心迷惑す」に対応する。

・秦舞陽色變振恐、群臣怪之、荊軻顧笑舞陽、前謝曰、北蕃蠻夷之鄙人、未嘗見天子、故振慴　　『史記』刺客列伝　371

「振慴」とは「恐れおののく」意であり、「恐れおののく」と「とまどう・どうしてよいか分からない」との間には意味的連鎖関係を見いだせよう。

以上、漢文脈の軍記物語においては次に掲げるような意で用いられていた。

［意味ｎ　］　とまどう・どうしてよいか分からない－“困惑”系

さらに、比較的この語の用例が多いのは室町期末のキリシタン資料である。

３－２　キリシタン資料における用例と意味

・ある時、狼喉に大きな骨を立てて迷惑ここにきはまって、鶴の傍へ行って、

「この難儀を救ひお助けあらうお方は…　『キリシタン版　エソポ物語』447

漢字・仮名交じり文の『古活字本伊曾保物語』では次のようになっている。

・有時、狼喉に大きなる骨を立て難儀に及びける折節、　16ウ

大塚光信（1983：131 ）は“迷惑”の意について、ローマ字本の“迷惑”が“難儀”という語に対応している点から、また同時代の書簡文の分析などを通じて、「途方に暮れる」という意味より一歩進んだ「コマルこと、難儀、苦労、辛労」という意味と見ている。また、福島邦道（1983ａ：50）は対訳本との比較を通して「大きな危難であって、苦悩であって、それは『困る』程度のものではないのである」としている。ローマ字本では「迷惑ここにきはまって」とあり、字義通りに解釈するなら「“迷惑”な状態が頂点に達し（きはまって）」たのであり、この事実を受けて「この難儀を」と発話している。そこで“迷惑”そのものの意味は、やはり「とまどう・どうしてよいか分からない」よりも程度がはなはだしい、「難儀」あるいは「苦悩」と解すべきかと思われる。

［意味　ｎ］　難儀。大変なこと。つらいこと。－“苦痛”系

また前記福島（1983）は「苦悩」の意を導くに、『日葡辞書』をひいている。

・Meiuacu　メイワク(迷惑)苦悩あるいは心を痛めること　（例） Meiuacu xenban nari(迷惑千万なり)この上ない悩みと苦しみとを感じる

Meiuacu na　メイワクナ(迷惑な)心を痛ませるような(こと)、または苦悩を引き起こすような(こと)　『邦訳日葡辞書』

キリシタン資料を解する上での『日葡辞書』の重要性は言を俟たないが、同書から“迷惑”の意の１つとして、「とまどう・どうしてよいか分からない」という意から更に進んだ、「苦悩あるいは心を痛めること」という意を挙げることができる。

［意味　ｎ］　苦悩あるいは心を痛めること。“苦悩”系

先の『伊曾保物語』と同じく、当時の口語を反映しているとされる『キリシタン版平家物語』においては、この語の用例を三例見いだせる。

・さても迷惑なことかな。君のおためにに奉公の忠をいたさうずるとすれば47

これは不孝か不忠かの選択を迫られる場面で、「途方に暮れる」意ととれる。

・妓王は出されてわらは一人をとどめおかせられば、なほなほ迷惑に存ぜうず。 82

妓王と自分（仏）の二人を館に留めることは“片腹痛い”ことだという文脈が先行しており、自分一人を留め置かれるのは“なほなほ迷惑に存ず”と続いているところから、「困惑する」の意で解釈できる。

・六代御前つひにのがることはかなふまじい　武士ども討ち入ってさがすならば、おのおのも御迷惑あらうず。 385

これは「困惑」か「難儀」の意と解せよう。

次に宗教系文学の中に用いられた例を見る。

・辛労の時ハ誰とともにか悦び、危きときハ誰にかたのみをかけ、病の時ハ何たる人の療治をうけ、迷惑の時ハ如何なる人の異見を乞ひ、用ある時は誰人の合力をうけんとかするぞ　『ぎやどぺかどる』上82オ

・世界は辛労の器、虚き学校、謀り多き市場、迷惑の難路、泥土の深沼、闇を籠たる楼内、山賊の中途、苦海の逆浪なりと　『同』下27オ

・此覚悟をバなさずして何事をかするや、此迷惑を遁れん為にハ、善を求め、御禁めを守る事何の難き事とかせんや　『同』上50ウ

断片的な章句ではあるが、第一例は“辛労の時”と並列している点から「難儀」や「苦難」ではなく、かつ“如何なる人の異見を乞ひ”と続く点から「困惑」の意ともとれ、かつ“病のとき”と“迷惑のとき”とを対照してその対処の仕方に言及している点から、肉体的な病気に対する精神的に病んでいる状態すなわち「苦悩」の意とも解されよう。二は「難儀」、三はそれから逃れるために“善を求め、御禁めを守る”とあるように、「苦悩」と解せそうである。

『キリシタン版エソポ物語』『キリシタン版平家物語』と『ぎやどぺかどる』との相違点は前者が口語、後者は文語という文体の差、かつ後者は内容的に宗教系文学であるという点である。後の点から次の例とも関連させて考えたい。

・くらゐほまれをのぞみなげき、身をたかぶる事も、みもなき事なり　こつにくののぞみをしたひ、いごふかくめいわくすべき事をのぞむは、みもなき事也　国字本『こんてむつすむん地』1ウ

・よろづのめいわくをのがれて、くつろぎにいたらん事やすかるべき事なれども、あだんのとがゆへに、いのせんしやといふげんざいにてあにましきしんのくはほうをうしなひし者也　国字本『こんてむつすむん地』21オ

新村出他（1957：201 ）の校註では「悲しみ悔いること」の意ととっている。前出の『ぎやどぺかどる』『こんてむつすむん地』における用例は意味的には『日葡辞書』との関連が見られる。前者において「肉体的な病気」に対する「精神的に病んでいる状態」とは何かというと、それは「精神的に苦悩を抱いている状態」と解せようし、後者において「地位や名誉を欲する心に任せたあげく以後にひどく“迷惑すべき”ことをのぞむのは」と言うのは欲望ゆえの苦悩を指すと解せよう。さらに『コリャード懺悔録』にも用例１例を見る。

・御ミサの中にも念があち散りこち散りすれば、迷惑致しまらする　　28

この例ではミサの最中に気持ちが集中せず散漫になることについての記述であるが、ここでの意味も「苦悩あるいは心を痛めること」と解せよう。「苦悩あるいは心を痛めること」との意は先に挙げた『日葡辞書』の記述に見られるものだが、この意味に解釈できる例は宗教系文学に多く見られるようである。

以上キリシタン資料に見いだした“迷惑”の用例を抜粋した。キリシタン資料に用例が比較的多く見いだされることに関しては、福島（1983ｂ：89）に指摘があるように、キリシタン文学に仏教用語が多用されていることと関わりがあるのかもしれない。しかし意味的には仏教語本来の意味の延長線上にあるとは言え、かなりの懸隔があり、また本来の意と『日葡辞書』の「苦悩あるいは心を痛めること」という意とは隔たりがかなり大きいと、言わねばならない。

３－３　狂言における用例と意味

同じく口語を反映している狂言にも用例が多い。『大蔵虎明本狂言集』から約１００例の用例を得たが、次のような談話の体をとる１パターンがある。

・「尤やりたひが、是は某に下されたほどにやる事はならぬ」

「それはめいわくじや、両人の者が、毎月あゆみをはこふで、今夜も一つにつやを申たに、くれまひとおしやるはきこえぬ」　　［連歌毘沙門］32

池田廣司他（1972：32）はこの用例に「おもしろくない・不愉快だ」との注を付している。話者一が話者二に対してある要求を出すが、二に拒否された場面で応答詞のように用いられており、話者一の心情的反応を表す語である。二者の関わりの中で一方の行為によって引き起こされた心情―ここではおもしろくない・不愉快だ―という意味はまさに現代における意に通ずると思われる。

［意味　ｎ］　　相手の行為－おもしろくない・不愉快だ

・「歌を一首づゝ、御年貢によそへて、申あげいとの御事じや程に、いそい

で申あげい」

甲「それはめいわくで御ざる」　［餅酒］45

この用例は前の例同様談話において相手が無理難題を持ち出して来た場面での、相手の言ったことに対する心情的反応を表す。相手の言ったことに対する否定的感情という点で前の例と同一である。相手の要求に対して、あるいは相手の言動に接して、応答詞的に発する言葉の「困った」「どうしよう」そして「いやだ」という意味は等心円状に並んでいるように見える。

また次の例のように使役の形をとったものもある。

・「そのやうにりふじんな事おしやる、所のとしよりと見えたが、むりな事をいふ人じや」

「いやおぬし共に、めいわくさせう」　［老武者］139

この用例は使役形を使っており、他者との関わりの中で自己の行為によって相手をマイナスの状態、好ましからぬ状態に陥れようということである。意図的に、かつ相手に不利益を与えるということから、“迷惑”の現代用いられている意味への関連が強いと思われるが、橋渡し的存在としてとらえるにはさらに多くの用例を要しよう。次の例も同様の例である。

・よの所へたちこへたらは、たちまちめいわくさせうずれ共、京内参りといふ程に、此度はさしおかふ　［じせんせき］227

次の用例は談話の中ではなく、いわゆるト書き的部分である。従って二者の関わりという背景がない点で前の例と異なっている。

・しうにあひてかさをみせて、…しうきせて見る、見えるによって、めいわくして、又見えぬていにする時、しうよろこびて　［隠笠］85

着ると姿が消せる「隠笠」を着せて、姿が消えると思いきや消えないという場面で、「苦痛」「苦悩」と解するには重きに過ぎ、「当惑」程度と解せよう。

以上の収集した例を見ると、意味的には「途方に暮れる」の系列に収まると見られる「困惑・当惑する」という意から、「困惑」の程度がはなはだしくなると「難儀」や「苦痛」に、さらに「苦悩」の意にも力点が移っていくと思われる。さらに他者との直接的関わりにおいて、相手の行為が自分自身に及んだ結果として感ずる否定的感情を込めて用いる心情的反応として「不都合だ」というニュアンスを帯びることが見られる。資料の性質から、狂言台本として話しことばが主であるという点、談話の体であることは注目してよいと思われる。

関連して謡曲の例を見る。

・さてさてにがにがしいことを申したものかな、あのごとくご折檻にて候はば申すまいものを、いづれもご器用なと申したらば、ご機嫌もよからうと存じて申し出して、迷惑に存ずる、さぞ花松殿はご迷惑に思しめさうずるさりながら、はや申し出だしたことなれば、取り返されも致されず、迷惑これに過ぎぬことぢや…（略）…われらが口ゆゑに花のやうなるおんことを、空しくなし申したるおんことの迷惑さは、この上はわれらがこの世にありても詮なし　［丹後物狂い］203-204

この部分も口語である。出典の注によれば一番目の意味は「困惑してしまうことだ・どうしてよいかわからぬわい」である。二番目は「今と同じような使い方」とあり「不都合だ」の意と解せる。三番目は「こんなに困ったことはないわい」と「困惑」の意にとっている。四番目は「申し訳なさ」ととっているが、これは二者の関係において自己の行為が相手に及んだ結果、相手がマイナスの感情を感ずることに対して、申し訳ないなどの感情を込めて用いるという、現代語の意に通ずる「申し訳ない」の意味である。この例も、“迷惑”という語が当時幾通りかの意味あいで使い分けられていたことを物語る証左となろう。

［意味　n］　自分の行為が相手に不利益を生ずる－申し訳ない

引用したキリシタン資料の刊行は1600年前後である。狂言資料をも合わせて、“迷惑”という語が用いられていた時代と意味的広がりを伺うことができる。

3－4　江戸から明治へ

16世紀末、壬辰の倭乱の結果日本に抑留されていた康遇聖の手になる『捷解新語』は、その『捷解新語』原刊本と、ほぼ1世紀を隔てて改定された重刊改修『捷解新語』と合わせ、当時の国語の変遷を知る上で国語学的に価値があるとされている。『三本對照』（1973：315 ）によれば『原刊本』の“迷惑”が『重刊本』では「難儀」「気の毒」に変えられている部分があり、“迷惑”はもともと「当惑」の意を表していたが、現代的意味への移行の過程にあったため原義を保存すべく他の語に変えられた箇所があったとしている。すなわち16世紀末から百年の間を“迷惑”の現代的意味への過渡期と見ている。

江戸期の庶民の口語を映す資料では現代の意に近い用例が多く見いだされる。

・出刃庖丁で人をあやめれば人にも難義させ面々も迷惑するであるまいか　『浮世床』362

・迷惑な兒は祭で牛斗　『俳風柳多留』37

松井利彦（1993）は明治初期“迷惑”は俗語・国民語としての「こまる」という意で使うものと、中国製漢語のまま国民語になっていない「迷う・まごつく」の意で使うものとが二層構造になっており、この２種の“迷惑”を作品において意識的に使い分けたのが二葉亭四迷であるという。

- 「文さん疾く為ないと遅くなるヨ」トいふお政の声に圭角はないが、文三の胸にはぎっくり応えて返答にも迷惑（まごつ）く　262
- 内の文三なんざア盆暗の意久地なしだッちゃない。二十三にも成ッて親を養す所か自分の居所立所にさへ迷惑（まごつい）てる　272
- 「それは御信切…難有いが…」ト言懸けて文三は黙して仕舞った。迷惑は匿しても匿しきれない。自ら顔色に表れてゐる。　286
- 頼まれて…英語の下稽古をしてやる、といふ。「いや迷惑な」と…　312

『浮雲』

明治期の文学において、現代に近い意の用例は容易に見いだすことができる。

- 分らぬ事いひ出して、嘸貴君御迷惑で御座んしてしよ　『にごりえ』38
- 足の裏へ泥が着いて、縁側へ梅の花の印を押す位な事は、只御三の迷惑にはなるか知れんが、我輩の苦痛とは申されない。『我輩は猫である』104

4　まとめ

“迷惑”という語に焦点を当て、特に意味の変遷上重要である室町時代末を中心に、まことに粗くではあるが用例を収集しその意味について考察してきた。

仏教語としての出自をもつこの語はもともと「**迷うこと・道理に迷うこと**」の意で用いられた。明庵栄西の『興禅護国論』にもこの意で用いられている。ほぼ成立時期を同じくする『吾妻鑑』『平家物語』における用例では「迷うこと」から「**とまどう・どうしてよいか分からない・困惑**」という意で用いられている。これら軍記物語は一は変体漢文、一は和漢混淆文であり、漢字・漢文脈とのつながりが濃く、とりわけ後者は内容的にも仏教思想との関連があり、そこに接点を見いだせよう。

次いで1590年代から1610年代にかけて多く刊行されたキリシタン資料においては「**難儀・たいへんなこと・つらいこと**」という意味的拡張が見られる。時代的に重なる『雑兵物語』にもこの意味で解せる例がある。この書は口語体で書かれていること、また『伊曾保物語』『キリシタン版平家物語』も口語で書かれていることを勘案すると、当時の口語としての一般的な意味かとも思わ

れる。また『日葡辞書』に“迷惑”の語義として「**苦悩あるいは心を痛めること**」との記述があるが、宗教系の文学の用例にこの意で解せるものが多い。

次に室町期の口語を反映する狂言資料などを見ると「とまどう・当惑する」「困る・困惑する」「（他者との関わりの中で他者の行為が自身に及んだ結果）**おもしろくない・不愉快だ**」「（他者との関わりの中で自身の行為が他者に及んだ結果）**申し訳ない・気の毒だ**」という意でも用いられ、この意味は現代的意味に繋がってくると思われる。このような意味の分化プロセスは『捷解新語』の２本の対照によってもあとづけられている。

以上のような意味的変遷を経て、“迷惑”という語の今日に用いられている意味が成立していることを概観してきた。

今後の課題としては、“迷惑”の意が通時的に変遷してきた背後にある、日本人の精神構造についても考察したい。中国では現代でも仏教語としての意味の色彩が残っており、コリア語においても“迷惑”は「惑わされること、迷うこと」を意味し、日本語の現代的意味に対応するのは“弊”であるという。(注)

特に、大きく意味が移行したと見られるキリシタン資料成立期において、日本人の精神構造形成に関与した要因について、他の史料とも併せ、考察したい。

(注)次の作品に用例の有無を調べた。竹取物語・伊勢物語・大和物語・宇津保物語・土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・枕草子・紫式部日記・源氏物語・栄花物語・堤中納言物語・浜松中納言物語・夜の寝覚・狭衣物語・とりかへばや物語・今昔物語・発心集・保元物語・宇治拾遺物語・徒然草・方丈記など

(注)韓国の留学生の方に伺い、『日韓熟語対照辞典』（1993）国書刊行会　で確認。

【参考文献】

山田孝雄（1940）『國語の中に於ける漢語の研究』寶文館
大塚光信校註（1971）『キリシタン版エソポ物語』角川文庫
大塚光信（1983）『キリシタン版エソポのハブラス私注』臨川書店
福島邦道（1983ａ）「『迷惑』考－対訳による－」『国語国文』
新村出、柊源一校註（1957/1960）『切支丹文学集』上・下　朝日新聞社
福島邦道（1983ｂ）『続キリシタン資料と国語研究』笠間書院
池田廣司他（1972/1973/1983）『大蔵虎明本狂言集の研究』上・中・下 表現社

京都大学文学部国語学国文学研究室編（1973）『三本對照捷解新語釋文・索引・解題篇』
松井利彦（1993）「近代漢語の位相」『日本語学』明治書院

【用例出典】

本文中に明記したものと参考文献に挙げたものを除く

『毛沢東選集』（1991）人民出版社　新華書店
邦訳　『毛沢東選集』（1968）外文出版社
『現代漢語学習詞典』（1995）上海外国語教育出版社　訳文は筆者による
『金色夜叉』（1986）新潮文庫
中国語訳『金色夜叉』（1983）金福訳　上海訳文出版社
『徒然草』（1976）新潮文庫
中国語訳『徒然草』『日本古代随筆選』（1988）王以鋳訳　人民文学出版社
『風』…　『風の行方』佐藤愛子（1997）毎日新聞社
『教育』…　『教育は仁術』秋山仁（1997）『週刊朝日』1997・4・25号
『朝』…　“青木ペルー大使更迭”『朝日新聞』1997・5・13 付け夕刊
『万葉集注釋　巻第二』（1958）澤瀉久孝　中央公論社
『寛永三年版　吾妻鑑』（1979）峰岸明　笠間書院
『平家物語　上』（1959）　高木市之助他校訂　岩波古典文学大系
『史記　春秋戦国篇 』（1966）　田中謙二他　朝日新聞社
『文祿二年耶蘇會版　伊曽保物語』（1963）京都大学文学部国語学国文学研究室編
『邦訳　日葡辞書』（1980）土井忠生他　岩波書店
『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』（1966）亀井高孝他　吉川弘文館
『キリシタン版ぎやどぺかどる本文・索引』（1987）豊島正文編　清文堂出版
『コンテムツス・ムンヂ』（1979）松岡洸司他解説　勉誠社
『コリャード懺悔録』（1957）大塚光信翻字　風間書房
『丹後物狂』『謡曲集上』（1960）横道萬里雄他校注　岩波古典文学大系
『浮世床』（1982）新潮日本古典集成
『俳風柳多留初編』『川柳狂歌集』（1958）杉本長重他校注岩波古典文学大系
『浮雲』（1971）『政治小説・坪内逍遥・二葉亭四迷集』筑摩書房
『にごりえ』（1981）『校注 樋口一葉』双文社出版
『我輩は猫である』（1961）夏目漱石　新潮文庫

（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻１年）